

---

# 鶴の恩返し

zens

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鶴の恩返し

### 【Nコード】

N8538E

### 【作者名】

zens

### 【あらすじ】

ある寒村に住む男と、恩返しに来た鶴のお話。

ある村はずれに20を過ぎても、結婚せず仕事にばかり精を出す男がおりました。

彼と同年代の男で結婚していない者はおらず、文字通り彼は売れ残りでした。

性格が悪かったり、仕事を怠けている。

そういった理由があるなら分かりますが、村人たちは何故仕事も真面目に行い、決して人当たりも悪くない、何より心優しい彼が結婚できないのか首を傾げていました。

それは、ある冬の夜のこと。

この冬一番の寒波がこの村を襲い、木こりの男は朝から峠まで出かけていました。

峠には、彼が蓄えている薪を置く小屋があります。

まだ彼の家には、薪は残っているのだが、村人のなかには薪が足りなくなっている者もいたのです。

自己責任だと言うものもいました。しかし、彼は危険を顧みず峠へやってきました。

その薪が足りないと言うのは、彼と親しい老夫婦で幼くして両親を失った彼を育ててくれた人物だったのです。

峠にたどり着くと、彼は薪を持っていけるだけ持っていくことにしました。

今年の冬は厳しいだろうと、村の皆が言っていたのを思い出したのです。

小屋から出ると、一段と風が強くなり視界はほとんどないも同然でした。

彼は、荷物の自分に巻きつけるようにすると、姿勢を低くして山を下り始めました。

この峠の途中には、小さな泉があり、そこに差し掛かった男は、ふと喉を潤そうと立ち寄りました。

すると、彼の視線の先には、1羽の鶴が雪の上に横たわっていた。

「・・・これは可哀想に」

ほんの少ししか、雪を被っていない所を見るに、まだ生きているのかもしれない。

辺りを見回しても、仲間の鶴は見当たらない。きっとこの鶴は逃げ

遅れてしまったのだろう。

そう思うと、途端に彼はこの鶴が不憫に思えた。

助かる見込みがあるなら、助けたい。助からぬのなら、せめて私の手で弔ってやろう。

そこで、彼は鶴を家に連れ帰ることにしました。

しかし、鶴は既に息絶えており、雪が降り止んだ翌日、彼はその鶴の墓を庭に作り、埋めると、老夫婦ともに祈りました。

それから、さらに1年の月日が経ちました。

木こりの男は、未だに独り身でした。

そして、相変わらず仕事熱心で、心優しい性格のままでありました。

村人たちの勧めもあつて数度のお見合いもしたが、結局結婚には至りません。

ますます村人たちは、不思議に思った。どうして、彼は結婚したからないのか、と。

そんなある夜のこと。

木こりの男は、仕事後の晩酌を終え、床につこうとすると扉を叩く音が聞こえてきました。

彼は初めは風の悪戯と思い無視していましたが、しかし、この日は珍しくも風は吹いていません。

・・・コンコン。

木の板で出来た扉を叩く音はなお続いています。気のせいでも風のせいではありません。

男はごくりと唾を飲み込みました。

この扉の先に誰かがいるのだと。

しかし、こんな夜中に一体誰だろうか？

男は、少しの間逡巡したものの眠い目をこすりながら扉を開けました。

「遅い」

すると、そこには、１２、３と思われる少女が１人立っていました。男は不思議に思いました。

こんな冬の寒い夜中に、こんな幼い子供が何故歩いているのかと。

それに、この少女は村人ではない。何かの物の怪の類かもしれない。

「こんな夜中に何の用事ですか？」

すると、少女は彼を見たままぼつと火がついたように赤くなりました。

男は、不思議に思いました。何故赤くなるのかと。

彼は、裸で出てきたわけでもありません。

男が首をひねっていると、少女は男を見上げながら悲しそうな顔をしました。

まるで、捨てられた子猫のような顔です。

男はますます訳が分からなくなりました。このような少女は頭のことを探しても知り合いにいないのです。すると、少女はもじもじとし始めました。

「あの・・・覚えていらっしませんか？」

そう言われても、男はこの少女とは初対面のはずです。

当然、彼は首を横に振ります。

一方の少女は、なおも食い下がりました。

「いいえ、そのようなことはありません」

「申し訳ないが、私も君のような女の子は知らないのです」

どうも話は平行線をたどったままです。

「……とりあえず、玄関で話をしても寒いでしょうし、中で詳しく話を聞きましょう。汚い所ですが上がってください」

男は、ここで話をしても寒いだろうと思い、少女を中に上げることになりました。

少女を家にあげると、男は薪を囲炉裏に放り込み、火をつけます。

「ところで、君は一体誰なんだい？」

少女は男の問いにこう答えました。

「はい。私はあの時の鶴です」

「鶴？」

「はい。あなたが弔ってくださいったあの時の鶴です」

素っ頓狂な顔をする男と違い、少女は至って真面目でした。

「……しかし、あの鶴は死んでいたはず」

「はい。ですが、私はあなたにどうしても恩返しがしたかったので。そして、その願いが叶って、こうして人として生まれ変わりました」

男は少女の話を聞き終わると、魂が抜けたようにぼかんとしていま

した。

死んだ者が生き返るということは、彼も物語で読んだことはあってもこうして実際に会うとは思ってもいなかったのです。

彼は混乱していました。少女は嘘をついているようには到底見えません。

「百歩譲って、そのことは置いておくでしょう。ところで、何か目的があつてきたのではないか？」

男は、とりあえずそのことは脇に置いて、話を逸らします。

少女は、ああそうでしたとわざとらしく前置きを置くと話を進めました。

「はい。実は、あなたにお礼がしたいと思ひまして。・・・妻としてお側に置いて頂けないでしょうか？ 誠心誠意、一生をかけてあなたに尽くします」

しかし、男は迷う素振りすら見せることなく言いました。

「申し訳ないが、気持ちだけで十分です」

それこそ、何故家にあげたのかと言わんばかりにきつぱりと。

すると、少女は初めて動揺した表情を見せました。

「ど、どうしてですか!？」

それでも、食い下がる少女に男は最後の言葉をかけました。

「・・・私は、年下には興味が持てないのです。あなたは、どう見ても12、3歳。私は年上にしか興味はないのです」

そう。

男がこれまで結婚しなかったのは、そういう理由があったからでした。

そして、翌朝には出て行ってほしい。そう告げました。

この村では、男女の同棲は家族以外に認められてはいないのです。

「うつつ・・・ひぐつ・・・。・・・いいもん、言いふらすから」

どうやら、少女はこれまで猫を被っていたようです。

ここにきて、少女は初めて泣き顔を見せました。

それを見て男は、慌てました。

「ちょっと待った。私は何をしたというのか!？」

「期待させるだけ期待させておいて、ぽいつて捨てた」

男はその言葉に、大きく戸惑いました。

そして、1つ考えました。

「分かりました。そこまで言うならあなたの恩返しを受けましょう」

「・・・ありがとうございます。誠心誠意、恩を返させていただきます」

男は、ままごとにつき合うようなものだ和高を括っていました。

村の子供たちは、こういうままごとをしたがることを思い出したの

です。

すぐに飽きて出て行くに違いない。男は、そう考えました。

しかし、彼はまだ知りません。この少女が実は老夫婦の孫娘であることを。

そして、今日の出来事自体が、村をあげての陰謀だということにも。

当然、翌日には、村中に同棲の噂が広まっていました。

男がいつものように薪を村に持って行くと待ち構えたように村人が祝福の声をかけるのです。

「聞きましたよ。ようやく結婚相手が見つかったそうですね。おめでとっ」

「いやあ、嫁さん貰えてよかったな。で、子供はいつなんだ？」

「何でも若い奥さんじゃそうで。これは、子だくさんが期待できるの。ほっほっほっ」

男は、驚きました。

少女は、家でまだ眠っており、誰かに話した様子はありません。

男は首を傾げます。

しかし、答えは出ません。

すると、背後から少女の声が聞こえてきました。

「・・・もう知られちゃったんですね？　・・・今更、私を捨てるようなこと・・・しませんよね？」  
「っ！？」

男は、啞然として薪を地面に落しました。

「まさか・・・」

「ええ、そのまさかです。あ、もちろん村の皆さんも協力して下ったんですよ？」

「村の掟は、分かっておるのか？　ささ、祝言はいつにするか？」  
「・・・」

村人たちは、皆が彼を祝福しているようです。

「久しくお世話になります」  
「・・・」

目の前の妻となる少女も嫌がる様子はありません。

男には、どこにも逃げ場がありません。

その後、男はなし崩しに少女と結婚し、幸せに暮らしたとさ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8538e/>

---

鶴の恩返し

2010年10月10日01時59分発行